

チエーリツプ。 四季だより



『生命の輝き』

画家 中島 潔

いつも私の中には、幼い頃のふるさがあります。ふるさと佐賀県・厳木町は自然に恵まれており、それが私の知らない間に自分の体内に入り込んで、絵に表れるようになったのでは、と思います。自然の中で何のこだわりもなく、自然のままに生き、生活していた頃のあの風がいまでも体に残っています。ゆれる柿木の上で街々を眺めたり、わきたつ草の匂いの中で陽光をいっぱいに浴びたり、小雨に震える紫陽花を見たり、桜吹雪の中を泣いて帰ったりと、自然の中で風の気配をいつも感じていました。

風は子どもの心をとて素直にさせます。自然に対してまじりけのない気持ちで接するのは子どもたちです。自然のいとなみの中で素直に溶け込み、自然そのものを感じます。子どもを描くには、この自然の四季というものと切り離すことはできません。雨が降り、雪が降り、紅葉する、それは“自然が表現する気持ち”なのです。子どもにも気持ちがあり、

自然にも気持ちがある。そして、この自然と子どもの喜怒哀楽とをドッキングさせて、観ている人に語りかけることが出来たら、もしかしたらそれが「やさしさ」なのかもしれない、そう思うのです。

ただ、その子どもの世界も決して楽しいことばかりではありません。辛くて、悲しくて、一生懸命我慢している部分があるのです。その一方で一番正直でもあります。正直なだけにかわいそう……。大人ほど処世術とか、自分を守る方法を知っていればいいのですが、子どもはすぐ傷ついてしまう。自分を守る術を知らないのです。素直に表現したいけれど、出来ない自分を心の奥にしまつて、ふっとみせる寂しげな童・少女の表情、それが私にはとても美しくとおしいというか好きですし、描きたい部分でもあるんです。

私の幼い頃は、生活は決して豊かではありませんでした。でもそのぶん、周りにはいつも自然があつて、楽しいことも嬉しいことも、もちろ



▲花の詩

ん辛いことも、すべて受け止めてくれていたのです。山へ行つて木の実を取り、川へ行つて魚を捕る。近所を歩けば、果物の木がどこにでもある。遊び場はすべて、自然の中でした。草や木、花は体の一部だったような気がします。幼い頃、母親が仕事に出ていない薄暗い家の中からぼ

っと表に出た時に、足元に咲く花がなんとも懐かしく、寂しく、愛らしく思え、その戸口にある花がなにもかえがたく大事に思えたものです。私の描く花が決して脇役ではなく、登場人物と同じくらい重要な役割をになっているのは、そんな幼い頃の自然とのかかわりにあるのかもしれない

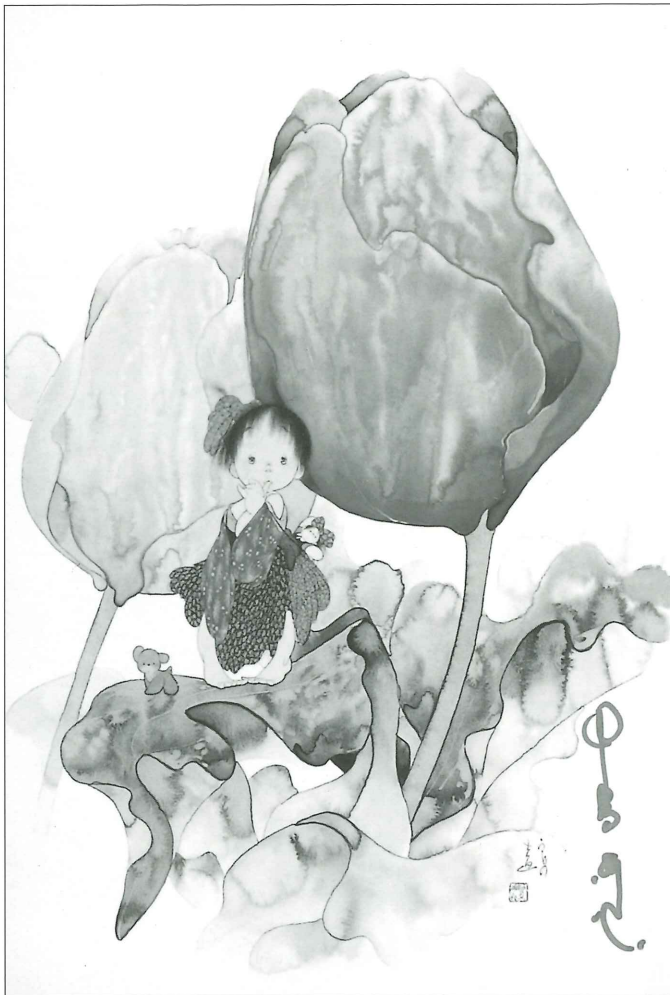
ません。だからこそ、どの葉一枚も、どの花びら一枚も、力を抜かずこころを込めて描きます。花が花として生きているように、子どもとのふれあいの中で生命を生きたる花を描ききりたいと思っています。

昨年の夏、チューリップ四季彩館で展覧会を開催することになり、記念にと初めてチューリップをモチーフに絵を描きました。それはチューリップとその中にたたずむ子どもを同じ大きさで描いた大きな二枚の絵です。大きなチューリップが子どもを包むように描くことで、生命の価値が等しく尊いこと、そして儚いことを少しでも伝えることが出来たら

と思ったのです。それが思いもかけず斬新な構図、モチーフと好評をいただきました。子どもの生命の輝きと花の生命、それは可愛く美しいゆえに儚くとも壊れやすい、だからこそ大切にしたい、それが私の作品のひとつのテーマです。そして、儚いゆえに美しく輝く花に、子どもたちのあふれる生命を見た時、刻みゆく生命のすばらしさを感じたのです。人も花も生まれては消え、一時も留まらず時とともに流れゆく、だから美しいのです。喜びがあり、哀しみがあるから生命は輝くのです。「生命は巡る」といいますが、決してまわり巡っているわけではない

のです。なぜなら、花は一回散ると同じ花は絶対咲きません。同じ形はしていても、全く同じものではなく、新しいものです。人間も同じ、巡りはしない。だからその一刻一瞬が大事ですし、自分を大事にしていかな

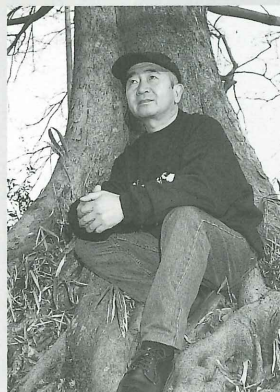
いといけない。やがては消えゆく儚い存在への想い、草木や花そして人の生命を慈しむまなざし、それを大事にしたい、いまそのことをひしひしと感じています。



▲花 童

【略歴】

なかしま きよし



一九四三年
中国東北部(旧満州)に生まれる。二歳で両親の生まれ故郷・佐賀へ戻る。
一九六一年 一八歳
佐賀県立唐津西高校卒業。母の死により上京を決意。働きながら絵を描き続け、基礎的なデッサンを独学で身に付ける。
一九六四年 二二歳
東京銀座の広告会社に就職。イラストレーター、広告プロデューサーとしてその才能を認められ活躍。アートディレクターとして数々の賞を受賞。
一九七六年 三三歳
独立し、フリーとしての活動をはじめ

一九八二年 三九歳
五月、NHKテレビ「みんなのうた」へかんからすのイメージ画を、同じく八月に(こんぼの思い出)を手がけ、一躍全国的にブームを巻き起こす。九月、小田急百貨店新宿店で初の個展を開く。
一九八六年 四三歳
NHK受信料告知アニメーションを制作。発表。反響を呼び、以後現在に至るまでシリーズ十二本を手がける。
一九八七年 四四歳
絵本「木霊みよつと」でボローニヤ国際児童図書展でグラフィック賞を受賞。
一九九〇年 四七歳
'90大阪花の万博のシンボルタワー「いのちの塔」のイメージキャラクターをデザイン。
一九九六年 五三歳
童謡「わらべうた」をモチーフに童画の集大成としての「ふるさとの詩」を発表。
一九九八年 五五歳
八月、「源氏物語五十四帖」が完成。
二〇〇二年 五九歳
八月、NHK-TV「みんなのうた」へ恋花火のイメージ画を制作・放送。
二〇〇三年
八月チューリップ四季彩館にて「風の画家 中島潔の世界展」開催。

文学に登場する チューリップ

日本編

小説

永井 荷風（一八七九—一九五九年）
『ふらんす物語（明治四十二年）』

より

——迂曲する角の処々には、花壇があつて、チューリップの鮮やかな色分け、ダリアの紅色、薔薇の粧ひは、あたりの薄暗いために、丁度寝室の燈火がおぼろに照す女の衣裳を見るやう。影なるベンチには動かぬ男女の尽きざる話声も聞こえる。（「雲」）

——門に近く詩人ルコント・ド・リールの石像の周囲には五色に色分けしたチューリップの花が明い日光を受けて錦の織模様をやう。其の後方二面やがて泉水のほうへ下りるあたりまで、さしも広い園内は正しく列をなした橡の木立の若葉で、こんもりと蔽ひ尽くされて居る。（「巴里のわかれ」）

エッセイ

岡本かの子（明治三—昭和一四）
『五月の朝の花』より

そら、大粒の赤玉、白玉のメノウを七宝の青い葉茎がくつきりとうけとめている、チューリップ！
ルビーと紫水晶のかけらのスイートピー。

くじゃくの彩羽の紋所ばかり抜いて並べたバンジー。

毛唐国の花だとさげすみながら、人は何と争つて五月の花壇の真中に何よりも大切にこの宝石の様な花たちを、栽培するようになつたことよ。

さて、その花達に夜の間宿つた露、朝日が射せば香わしいほのかな露となつて私達のもすそをしめらす。



短歌・俳句

チューリップ影もつくらず開きけり
長谷川かな女

どの視野もチューリップ咲く海より
も少し明るき街見えながら
阿部 伝路

歩く子の手に父母の手やチューリップ
嶋田 一步

春日射す田に乳牛と吾子遊びおり
そを包み咲きチューリップ畑
石垣美喜子

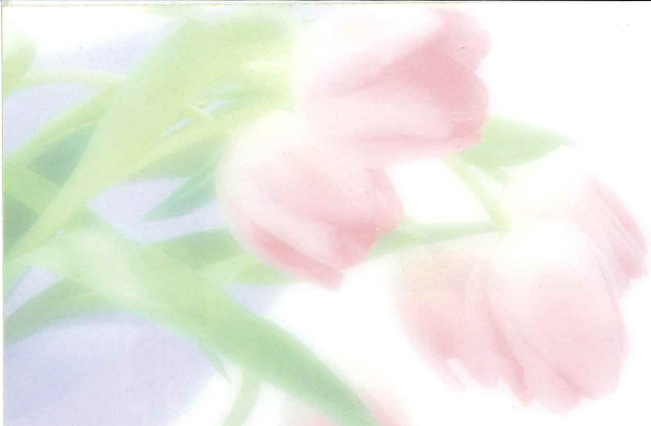


チューリップに関する文学の歴史をさかのぼると、十世紀頃のイスラム文芸にチューリップが盛んに登場するほか、十二世紀頃にはチューリップを題材にその美しさを賞賛した詩歌が記録されています。また、オランダ人の黒いチューリップへの情熱を描いたアレクサンドル・デュマの小説、「黒いチューリップ」（オランダ・一八五〇年）は有名です（四季だより第六巻参照）。

一方、日本におけるチューリップは、江戸時代末期（一八二八年）に著された『本草図譜』の中でチューリップの名称で初めて紹介された後、一八六三年頃に初めて球根がもたらされ、明治時代には日本の文学にも登場するようになります。

昨年十月に桂書房から出版された久

泉迪雄（ひさいずみ・みちお）〈東京都出身、富山市在住〉著の「密明かり」にはチューリップを題材にした詩歌や文学が多数紹介されている一節があります。その中からいくつかご紹介します。



チューリップの花には侏儒が棲む
と思ふ

松本たかし



起きてみてまた直ぐ寝たくなる時
の力なき眼に愛でしチューリップ

石川 啄木

葉桜のかぶさつて来るチューリップ

中村 汀女

風吹けば池の浮き床のチューリップ
プゆるゆる流れて入りゆく初夏に

深山 榮

切りすてられるまでのしばらく
のチューリップが地に描く花模様

長澤 美津

チューリップの花首摘みて捨つる
田の花うづ高く紅の色なす

吉沢 弘

それぞれにうかぶ宙ありチューリ
ップ

皆吉 爽雨

詩

三好 達治

『間花集』(昭和九年)より

チューリップ

三好達治

蜂の羽根が
チューリップの花に消える
微風の中にひっそりと
客を迎へた赤い部屋

○ふるさと富山の詩人

山本 哲也

春 宵 — チューリップの摘花に —

羽毛の宵なのに
劃されたこの一隅は いま



いびつな彫琢の時間
覆面の農婦にいだかれた炎は
無辜の空間に
葬列のしとねをつくりながら
怨むように燃えている

夜は傾き
空虚な茎と葉のつながりばかり
花は
掌で
沈んでいく休息を戯れる

しどけない冠をたれて
いつまでも いつまでも
水煙の垣根の彼方へ
花の宵は
葬れていく

(年刊詩集『富山詩人』一九七一年版)

〔注〕引用の文芸作品の仮名遣いは、すべて原
作のままとした。

〔引用文献〕「窓明かり」久泉迪雄(桂書房)



世界のチューリップ生産

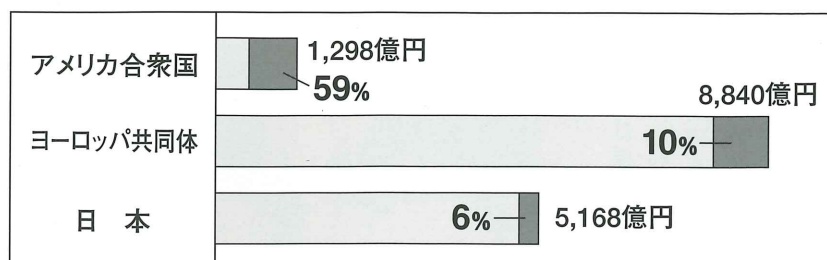
— 第九回国際花卉球根シンポジウムより —

先日、新潟県で行われた第九回国際花卉球根シンポジウムにおいて、オランダ・リッセ市にある国際花卉球根センターのJ・C・M・Buschman氏が「世界における球根切り花生産の現状と将来展望」をテーマに講演されました。その中で示されたチューリップに関する統計を中心に紹介します。

世界における主な切り花市場の現状

① 切り花消費量に占める輸入量の割合(額)

■ 輸入



② 切り花の主な輸入先

アメリカ合衆国	コロンビア 56%			
	エクアドル 17% オランダ 13% その他 14%			
ヨーロッパ共同体	ケニア 30%	イスラエル 16%	コロンビア 15%	その他 39%
日本	タイ 16%	コロンビア 12%	オランダ 12%	その他 60%

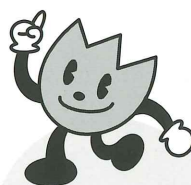
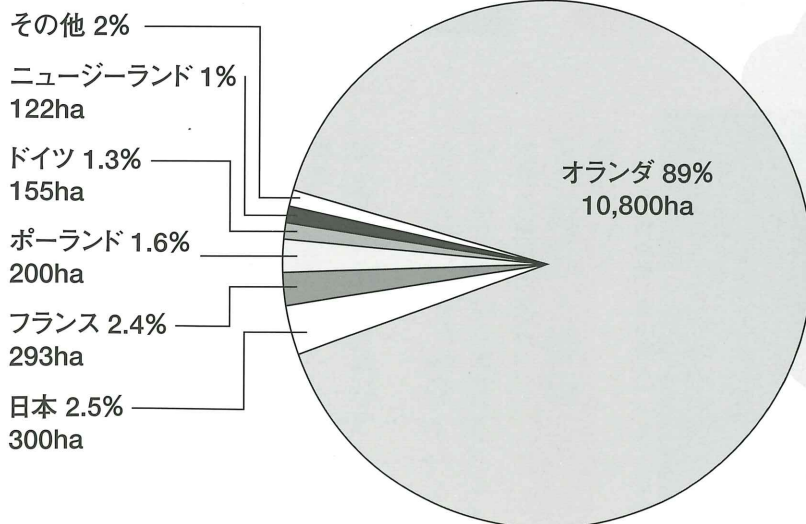
世界的にみると、切り花の主要な消費市場は、アメリカ合衆国、ヨーロッパ共同体、日本の3ヶ所です。それぞれの市場では、地元で生産された切り花が占める割合が高いですが、それに加え、栽培に適した気候をもち労働賃金が安い近隣諸国を中心とした様々な国から、かなりの量の切り花が輸入されています(グラフ①・②)。

こうした世界の切り花の生産、輸入、利用状況において、球根切り花、とりわけチューリップとユリは確固たる地位を占めています。



チューリップ球根の主な生産国

③ チューリップ球根の主な生産国とその面積



世界におけるチューリップ球根の主な生産国は、オランダ、日本、フランス、ポーランド、ドイツ、ニュージーランドで、主に国内の切り花生産や球根販売に利用されています。



● オランダにおけるチューリップ切り花生産の現状 ●

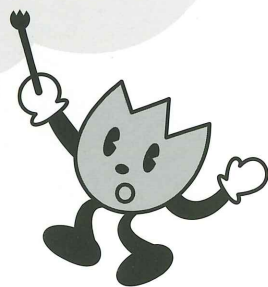
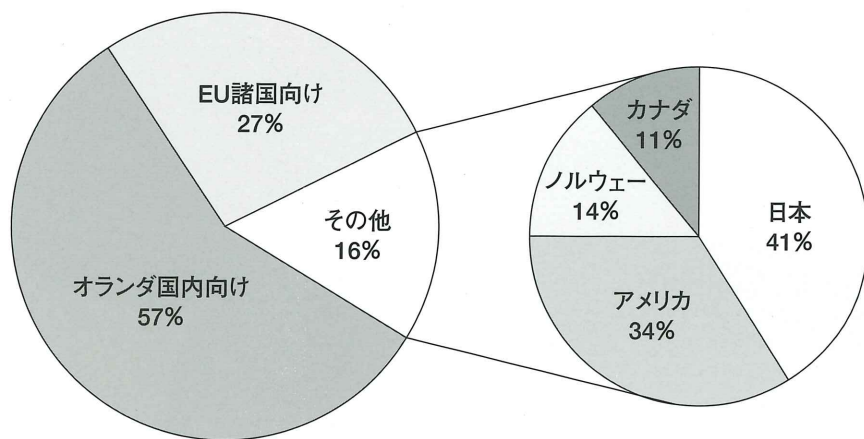
④ 球根生産量に占める切り花生産用球根の量

球根生産量	切り花用 23億球 53%	
	43億2千万球	

オランダにおけるチューリップ球根の生産量は43億2千万球です。その53%が切り花生産用に使用され、その切り花の約16%が国外に輸出されています(グラフ④・⑤)。

フランスでは、大部分の生産がオランダ資本の企業によって運営され、生産された球根はオランダの11月から12月定植の早期栽培に使用されています。南半球におけるチューリップは、10月から12月の秋咲きとなるように栽培されており、アメリカ合衆国、オランダ、日本、カナダへ輸出されます。

⑤ オランダ産チューリップ切り花の出荷先割合

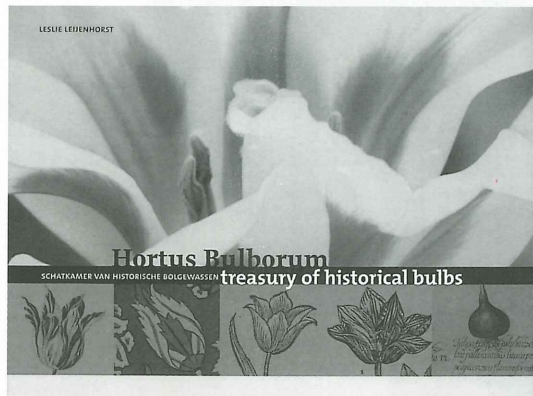


海外ニュース

歴史的球根の宝庫 「球根栽培博物館」

オランダ、リンメン市の球根栽培博物館(Hortus Bulborum)には、約一ヘクタールの品種保存園があり、そこでは一千種以上のチューリップが栽培されています。

今年春にこの博物館から発行された書籍『treasury of historical bulbs—Hortus Bulborum (歴史的球根の宝庫「球根栽培博物館」)』には、この博物館とその保存園がど



▲書籍「Hortus Bulborum —treasury of historical bulbs—」

のように生まれ、それらのチューリップコレクションが時を経てどのように発展してきたか、また、科学的見地からそれらのチューリップが現在の球根分類においてどのような意義を持つかが記載されています。

また、貴重な球根のコレクションのリストと共に、球根栽培の歴史について四つ以上の時代に分け、イラストやインタビュー記事等、一般に知られていない秘話なども盛り込まれています。博物館がそのまま一冊の本に凝縮されたような、この本の詳しい内容について、次号以降ご紹介します。



▲品種保存園(球根博物館)

チューリップ四季彩館
からのお知らせ

『第3回となみ球根感謝祭』

生産者が自信を持ってお勧めする約200品種の
富山県産チューリップ球根が勢ぞろい!

とき 10/9(土)～10/11(祝)

入場
無料

ところ チューリップ四季彩館ホール



▲第2回となみ球根感謝祭



チューリップ四季彩館
TONAMI TULIP GALLERY

2004年9月発行
(財) 砺波市花と緑の財団 〒939-1381 富山県砺波市中村100番地の1
TEL 0763-33-7716 FAX 0763-33-0090
URL <http://www.tulipfair.or.jp>